



一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン

2011年度事業報告書

(2011年6月6日～2012年5月31日)



連絡先： 一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン
〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町1丁目45番1-302号
電話06-6622-5645/ ファックス06-6621-7139
E-mail : community_4_children@yahoo.co.jp

はじめに

コミュニティ・4・チルドレン（略称C4C）は、皆様のご支援を受け、2011年6月6日に一般社団法人として産声をあげました。

報告書にもありますように、さっそく、タイ、フィリピンの現地団体への支援事業を開始しました。タイでは、日常的に両親と暮らすことができず、経済的に厳しい家庭の子どもたちへの具体的な支援事業を行っています。フィリピンでは、しょうがいのある子どもたちの包括的な支援事業を支援しています。

フィリピンとタイでそれぞれスタディツアーを開催、国内外の視察・調査活動、助成事業など初年度とは言え、積極的な取り組みができたのではないかと考えています。

一報で、本会の活動の広報、情報発信を強化し、協力いただける方（会員等）や連携していただける団体・機関を広げていく点では、より一層努力していかなければならないと考えています。

1. 海外 NGO 支援事業

2011年度は、タイ国カムクーンカムペン財団とフィリピン国 JPCOM-Cares と連携し、運営・活動を支援しました。

1-1. カムクーンカムペン財団（タイ国コンケン県）支援事業

①奨学金：出稼ぎ、死別、離婚などの理由によって両親と日常的に暮らしておらず、かつ経済的に苦しい家庭の中・高校生（専門学校を含む）、一学年につき5名、総勢30名に対して、年額6500バーツ（約1万8千円）を支援しています。2012年5月卒業生5名全員が（タイの新学期は6月に始まります）、大学もしくは短大に進学しました。

②地元文化の継承：地元のコンケン大学芸術学部の学生に、伝統舞踊と伝統楽器の演奏を教してもらっています。それまで自己表現が苦手だった子どもたちも、伝統音楽や舞踊を通じて自信を持つようになり、様々な場面において人前で自分の意見を言えるように成長してきました。また年長者（中学生）が年少者（小学生）に教えることで、より一層責任感を持つようになり、グループとしての一体感が生まれるようになりました。そして、タイ厚生省の禁煙キャンペーンの一環である「幸せを呼ぶ音楽」プロジェクト、毎年カオヤイ国立公園で行われる全国青少年環境キャンプなどのステージで、楽器演奏と踊りを披露しています。



子どもたちが演奏・踊りを披露した場、日時

| | | |
|----------------|------------------------------------|------------|
| 2011年10月23-24日 | 厚生省事業「イサーン健康づくりの音楽活動」 | 参加した子ども24名 |
| 11月9日 | コンケン大学「ロイクラトン祭り」 | 参加した子ども20名 |
| 11月17-21日 | アパイペート病院財団主催カオヤイ国立公園「カオヤイ象を偲ぶキャンプ」 | 参加した子ども26名 |
| 12月10-12日 | 厚生省事業「イサーン健康づくりの音楽活動」 | 参加した子ども16名 |
| 12月15日 | コンケン県「不正撲滅キャンペーン」 | 参加した子ども25名 |
| 2012年1月17日 | コンケン大学バーン・チワシン（入院している子どものための家） | 参加した子ども15名 |
| 2月17日 | コンケン大学 | 参加した子ども15名 |

5月2日 ノーンタカイ村の行事 参加した子ども 17名

| 練習実施月 | 実施日 | 参加人数(平均) | 練習実施月 | 実施日 | 参加人数(平均) |
|----------|-----|----------|----------|-----|----------|
| 2011年6月 | 1日間 | 30 | 2011年12月 | 6日間 | 20 |
| 2011年7月 | 2日間 | 30 | 2012年1月 | 3日間 | 12 |
| 2011年8月 | 2日間 | 30 | 2012年2月 | 3日間 | 12 |
| 2011年9月 | 1日間 | 20 | 2012年3月 | 6日間 | 12 |
| 2011年10月 | 0日間 | 0 | 2012年4月 | 4日間 | 15 |
| 2011年11月 | 7日間 | 20 | 2012年5月 | 5日間 | 15 |

③技術・知識の習得

月例読書会：2011年6月から9月までの3か月間、毎月1回カムクーンカムペン財団（略称KK財団）から奨学金支援を受けている30名の子どもたち（中学・高校・専門学校生）を中心に事務所に集まり、読んできた本の内容と感想をみんなの前で発表する読書会を行いました。このような活動を通じて、人の前で体や言葉で表現する技術を磨きます。参加は自由ですが、参加回数が多い子どもほど、勉強や活動に積極性をみせるようになります。しかし、年少者にとって読書は困難なようで、徐々に音楽による表現技術向上に重点を置くようになりました。

視察・研修：東北タイ・有機農法ネットワーク会議に参加しました。有機農法ネットワークは、全国の有機農法実践者とその賛同者が参加する団体で、毎年有機農法普及のための研修事業を行っています。研修では、毎回異なる有機農法実践者の農場を訪問し、方法や知識を学びます。子どもたちを参加させることによって、将来、自分の村に帰って農業で自立できるような知識や方法を学ぶことができます。農場訪問は、子どもたちにも楽しい研修となりました。

2012年2月18-19日参加人数17名、3月15-18日参加人数20名、4月6-12日参加人数17名

社会貢献：2011年6月12日 いつも子どもたちの瞑想修行でお世話になっているコンケン県ウェルワン寺の台所の掃除や食事作りのお手伝いをしました。参加人数12名

精神修行（瞑想修行）：タイでは、仏教の教えが日常生活や人生の指針になっています。瞑想修行は、平常心を養い、様々な困難に立ち向かうための精神性を培うため、幅広い世代のタイ人に人気があります。特にコンケン県ウェルワン寺とその関連施設では、若者向けに瞑想修行コースを開催しています。寺院で戒律を守りながら集団生活をすることによって、日頃体験できない規律を学びます。また僧侶も若者向けに道徳や親の恩などを教えます。子どもたちは、道徳知識や内観法を学ぶことによって、自分自身を見つめ、何事にも冷静に対処できるようになることが期待されます。1週間以上のコースに参加した子どもたちは、少し大人になって帰ってきました。



2011年6月15-30日ウェルワン寺にて、15歳以上の男女向け瞑想修行コース

2011年6月25-29日バーンケーにて、見習僧出家 参加人数5名

2011年10月7-21日ウェルワン寺にて、瞑想修行コース 参加人数6名

2012年4月16-29日ウェルワン寺にて、小学生低学年向け瞑想修行コース 参加人数10名

サバイバル・キャンプ：KK財団が活動する地域には、勉学に興味がなく学校にもあまり来ない子どもたちがいます。彼らの保護者は経済的に困難を抱えていたり、単に子どもに対して無責任であったり様々ですが、子どもたちは喫煙、飲酒、ばくちなどを覚え、今後将来が危ぶまれます。そのためKK財団の理事が関係する団体が行った「リスクな子どもたちのためのサバイバルキャンプ」（2011年7月5-10日）に、地域の学校から中学三年生の男子7名を参加させました。KK財団からもスタッフを派遣し協働したキャンプは、応急処置のやり方、水がないときに飲み水を捜す方法など、災害救

援の専門家がインストラクターとなって指導し、一人の男子がその厳しさに逃げ出すほどでした。しかし6日間のキャンプに耐えた地域の男子たちは、責任感や人に対する優しさに目覚めたようで、KK財団の様々な活動にも、より小さな子どもたちの引率役として活躍してくれています。

④コミュニティ植林：コミュニティにおける植林事業（森を愛する子どもプロジェクト Dek Hak

Khok） 2011年度より、子どもたちが住む地域で、子どもたちが中心となって行う公共林の復興・環境保全活動を始めました。



植林 KK財団のスタッフが地域の住民と自治体、学校と話し合いを進め、調整役となり、植林の準備を進めました。そして2011年6月22日にKK財団活動地域の村人、僧侶、学校の先生、生徒、地方自治体首長など、約250名が集まり、約1600㎡の村の公共林に約2000本の苗を植えました。これまで自分たちの公共林が衰退していくことに無関心だった大人たちも、参加する子どもたちの頑張りを見て、これからも子どもたちを参加させる植林事業の継続に協力することを約束してくれました。子どもたちも、大人たちと一緒に働くことで、少し社会的責任感に目覚めたようでした。



その後2012年5月26日に、子どもたち有志60名が、植林した公共地の雑草を抜き、さらなる植林のために土地

の世話をしました。

キャンプ（ナムナーオ国立公園） 村人たちが生活に十分な薬草、野菜、キノコなどをとることができる豊かな森を復活させるためには、植林だけでなく、森の重要性や森の役割を子どもたちに教える必要があります。なぜなら、子どもたちは後10年もすれば、大人として村の様々な社会的役割を担うことになるからです。そのため、小さい頃から森の特性を森の中でキャンプをしながら体感することに、植林事業は重点を置いています。2011年7月14-17日に地域の子どもたち42名が、隣県の山にある国立公園内でキャンプをしました。



野鳥保護を促進する環境団体から来たインストラクターとともに、いろいろなゲームを通じて森を体験しました。また、子どもたちの中でも高校生・専門学校生などは、自らも率先してゲームなどを行



い、小さな子どもたちを指導しました。このようなキャンプでの活動を通じて、子どもたちの中から青年リーダーを育てることも目標としています。

森の学習 地域の子どもたちが自分たちの公共林の中に入り、森に詳しい村の長老たちから様々な森の産物について学びました。2011年7月28-30日の3日間に渡り、地域の小学生（4-6年生）90人とKK財団の奨学生25人が参加しました。一

日 30 人の子どもたちを 4 チームに分け、森（低木林）に分け入り、長老たちに食用になるかどうかを聞きながら、キノコを収集しました。予想したより多くのキノコや他の植物が豊富にあることがわかり、子どもたちは元気いっぱいに楽しみました。子どもたちが森の重要性を学べる、このようなプログラムは継続して行っています。

⑤家族支援プロジェクト

カエル養殖研修：2011 年 9 月 11 日、子どもとその保護者たちを、コンケン県カヌアン郡ブン村自然活動センターで、食用ガエル養殖を行う農家に連れて行き、その飼育方法を学びました。参加した子どもと保護者は総勢 24 名。保護者の経済的貧困が原因で、十分な食事を与えられていない子どもたちがいます。カエルは、初期投資がそれほど高くなく、飼育方法も難しくないため、子どもたちでも飼うことができます。この講習を受けた後、実際に何人かの子どもは、自給用に、家でカエルを飼い始めました。



⑥交流事業

子ども会交流：地方都市近郊農村である KK 財団活動地域の子どもたちと、まだ森も豊かに残る山の中の村に住む子どもたちとの交流事業を始めました。

2012 年 5 月 11-12 日、サコンナコン県コーノイ村の子ども会を KK 財団活動地域であるコンケン県ノンメック村、ノータカイ村に招待し、異なる地域における生活や文化の違いを互いに学ぶ機会を持ちました。参加人数 45 名。それぞれが伝統音楽や踊りを披露し、お互いの地域のことを紹介しあうことによって、自分自身の地域の特徴や問題点を振り返ることができました。

1-2. JCom-Cares (フィリピン国バギオ市、ベンゲット州カバヤン町) 支援事業

ルソン島バギオ市のリハビリテーションセンター（STAC - Baguio）では、しょうがい児が自立して生活するために必要な理学療法、作業療法と教育支援を行っています。保護者会をはじめ自治体、専門機関、民間支援機関と協働しながら、しょうがいのある子どもたち 636 人に対するサービスを継続して提供しています。

それに加え、バギオ市からさらに山岳部に位置するカバヤン町の Ajuwan Therapeutic Center でも、現在 111 人のしょうがい児の個別ケアと自立支援を行っています。

カバヤン町では、中央小学校の 2 つの教室を町から提供してもらい、平日は教育支援のセッションを開くとともに、週 2 日バギオ市から理学療法士、介護士、介護ボランティアが赴いて、リハビリテーションを行いました。

また 2011 年 9 月には、しょうがい児のいる家庭・家族の経済的貧困を少しでも解消するために、養豚場を建設し、小規模養豚を通じた副収入獲得を希望する保護者への仔豚の



提供を事業に着手しています。

奨学金 バギオおよびラ・トリニダッドでは、7歳から16歳の8人に、カバヤンでは、7歳から18歳までの16人の合計24人の子どもたちに奨学金による教育支援を行いました。

療育支援 2つのセンターでは、子どもたち一人一人にあった支援計画を立て、それに従い提供できるサービスを行っています。2011年6月から2012年5月までにバギオのセンターでは、理学療法：1,923セッション、作業療法：2,172セッション、教育支援：1,589セッション、カバヤンのセンターでは、理学療法：238セッション、作業療法：37セッション、教育支援：332セッションを実施しました。

保護者セミナー 保護者セミナーを4回開催しました。7月7日と8日の二日間は、保護者向けに①発達障害、学習障害および自閉症、ダウン症などの障害の理解と、保護者としてのケアやアプローチの仕方について学習し理解する、②しょうがい児・者の権利とフィリピンの憲法や制度を理解するためのセミナーを開催しました。参加した17人の保護者のほとんどが新しい支援利用者でした。



保護者のグループダイナミックス 2012年2月18日、子どもたちへの食育をテーマにした保護者間の信頼関係プログラムを実施しました。カバヤン町のスタッフハウスに、保護者7人が集まり、子どもたちの発育、成長をサポートするおやつ作りを行いながら、お母さん同士の交流の機会を持ちました。



水治療法 (ハイドロセラピー) 9月15日パームグローブリゾートの温水プールで水治療法を行いました。温水プールの中では、温熱、圧力(水圧)、粘性といった温水の特性を利用し、浮力によって体にかかる加重を軽減した状態で、身体の柔軟性を高め、リラックスした状態に導くことができます。特に、身体障害のある子どもたちへのリハビリテーションの効果を狙って実施しました。

防災セミナー 10月19日。フィリピンは台風、豪雨、火山の噴火や地震による自然災害が多く発生します。JPCOM-CARESでは、普段から台風の接近やサービス中の災害発生に備えていますが、改めて防災と減災、そして災害リスクマネジメントを学ぶため、都市防災リスク軽減管理評議会(CDRMRC)の職員招いて講演と実技を行いました。

クリスマスパーティー (バギオ) 12月21日、復活大聖堂ミッションホールで、クリスマスパーティーを開催しました。参加した子どもたちと保護者60人はグループに分かれ、両親や保護者は合唱やダンス、子どもたちとスタッフはキリスト生誕のページェントを披露しました。また、保護者とスタッフは、全員の食事を準備しました。バギオ市内のセントルイス大学、セントルイス高校、エンジニアの協会、支援者有志の会、保護者会からは、クッキー、キャンディー、フェイスタオル、タンブラー、歯磨き粉、石鹸、学用品など子どもたちへのクリスマスプレゼントを提供していただきました。



仔豚銀行 母豚1頭の飼育スペース、産まれた仔豚の飼育用に4つのスペースを建設しました。また養豚用の餌のストックルーム、糞尿の浄化槽も整備しています。2012年2月25日に母豚を購入し、今後年間約10頭から20頭の仔豚を保護者の家庭に提供することを目指しています。

C. 海外プロジェクト助成事業

C4Cの活動趣旨に賛同し、子どもの健全な成長を願い、将来コミュニティづくりに貢献する大人となるような活動に対して助成事業を始めました。第一弾として、タイ国東北地方のサコンナコン県の農民レック・クットウォンケーオさんの事業を支援しています。

①「地域を愛する子どものプロジェクト」タイ国サコンナコン県クットバーク郡コーノイ村(2011年11月～2012年10月)

レックさんは東北タイ貧村出身の農民でありながら、複合・自然農業を推進し、自然を適正に利用



し、地域内で自給する農民ネットワーク形成に尽力した農民のリーダーです。国内外からも多くの人々が彼の方法を学びに来、彼も多くの講演をこなしてきました。これからは地域の知識、哲学、文化などを若い世代に継承していくことが、近年急激なグローバル化によって崩壊しつつあるコミュニティ再生のための最重要課題であると考えた彼は、現在村に住み農業を営みながら、青少年グループの支援活動を継続して行っています。本プロジェクトでは、彼が相談役として関わるコーノイ村の子ども会の活動を支援します。

コーノイ村は、サコンナコン県の森林が比較的豊かに残る山の中に位置しています。子ども会は、地元の小学生高学年から中学生までの約50人とOB・OGである高校生と大学生で構成され、年長者が率先して、年少の子どもたちを導きながら活動を行っています。本プロジェクトでは、子どもたちが、大人たちの指導のもと、自分たちの手でコミュニティとその人的・文化的・自然資源を調査し学び、報告書としてまとめる活動を行います。そのような活動を通して、子どもたちがコミュニティの問題を明確にし、将来、出稼ぎに行かなくても、地域内で暮らせるような生活知識や方法を学ぶことを期待しています

2. 視察・研修・ワークショップなど

2-1. スタディ・研修ツアー

①フィリピン・スタディツアーの実施：JPCOM-CARES との共同開催



2011年9月9日から17日まで、特定非営利活動法人み・らいず主催フィリピン研修スタディツアーを実施しました。フィリピン・ルソン島北部のバギオ市とカバヤン町において、不便な山岳地域に住むしょうがい児の生活を体感し、しょうがい児のための水治療法に参加した他、保護者の経済的自立を推進するために養豚場の建設作業も現地の人々と一緒に行いました。参加者は、み・らいずスタッフと学生ボランティア7名、C4Cスタッフの同行者2名、タイの

連携団体であるカムクーンキャンペーン財団から1名の計10名でした。

参加者のほとんどは、学生か大学を卒業したばかりの若い人たちで、最初は言葉の壁から消極的でしたが、徐々に現地スタッフとも打ち解け、しょうがい児とも積極的に遊ぶようになりました。常日頃から、日本でしょうがい児・者のガイドヘルパーを経験している若い人たちなので、フィリピンでの経験が即、日本の現場でも役に立つと信じています。

②タイ・スタディツアーの実施：カムクーンキャンペーン財団との共同開催

2012年3月20日から25日まで(5泊6日)、東北タイのカムクーンキャンペーン財団が行っているコンケン県ノンメック村での活動と、新たにC4Cが支援し始めたサコンナコン県のコーノイ村「地域を愛する子どものプロジェクト」を視察しました。参加者は、団体参加3名、他4名、C4C同行スタッフ2名の計9名でした。



短い日程でしたが、2カ村を訪問・ホームステイしました。どちらの村でも子どもたちと村人たちによる、歌や踊り、儀礼の歓迎を受けました。

コンケン県ノンメック村では、地域のコミュニティ、自治体、学校、子どもたちが協働で植林した公共地を訪れ、記念植樹を行いました。地方都市に近い農村であるノンメック村では、森林も破壊され、多くの人々が農業以外の賃金労働に従事し、子どもを見守る人がいないという問題があります。植林は、地元の自然に関する伝統的知識を子どもたちに継承すると同時に、森を豊かにし、村人が利用できる森の産物を増やし、少しでも家計の足しにすることで、出稼ぎに行った家族が子どもの元に帰ってこられる環境を整える目的があります。サコンナコン県コーノイ村では、子ども会のメンバーが村の文化のデモンストレーションを、あちこちの家で用意してくれていました。広大な森林に囲まれたコーノイ村では、農業や林業に従事する者が多く、森林保護活動や森の産物の加工方法を子どもたちが学ぶことは、将来においても村で自立して暮らせるような基盤づくりの目的があります。言葉によるコミュニケーションには不自由でしたが、直接現地の子どものたちや彼らを支援する大人たちの声が聞く時間が持てたことは、タイ人・日本人の双方にとって有意義でした。

また今回の日本人の訪問は、タイ国内でも、異なる環境におかれるコンケン県の子どものたちとサコンナコン県の子どものたちの相互交流が始まるきっかけとなりました。

2-2. 国内 I Do Café (あい・どう・かふゑ) 事業

子どもたちの明るい未来と育ちを願い、その想いを形にし、社会に貢献しようとしている実践者を招き、ディスカッションを通じて「つながり」と「広がり」を生み出すために、2か月に一度大阪を中心に開催しています。参加した人々がお互いに、オープンに話し、聴く空間を創り出すことを心がけています。目指すのは、I Do から We Do へ。一人の実践が、複数の実践へと、より広いつながりを持つことです。以下のように、世代を超えた多くの方々に参加していただきました。

第1回 I Do Café 7月2日(土) 16:00-17:30 於 ECC 国際外語専門学校7階 参加者17名

■テーマ：宮城県石巻市の子どものたちへの支援

■ゲスト：河内崇典さん(特定非営利法人み・らいず 代表理事)

東郷千恵美さん（子どもの居場所ほっとすぺーす石巻 スタッフ）

■内 容：

東日本大震災被災地の宮城県石巻市内の子どもたちが、まちの復興の一端を担えるようにサポートし、まちを元気づけるために活動をスタートした「石巻復興支援ネットワークやっぺす石巻」の取り組みをうかがい、子どもたちに寄り添うことの重要性と地域再生への過程についてお話いただきました。復興が始まったばかりの東北の被災地の話であるためか、参加者は年齢層も幅広く、職業も学生、教師、福祉士、会社員など様々で、ディスカッションの場では、話足りない人が多く、盛況に終わりました。

第2回 I Do Café 9月3日（土）15：00 - 17：00 於 ECC コンピュータ専門学校1号館3階 参加者12名

■テーマ：映像を通して伝えるリアル

■ゲスト：野田亮介さん（ビデオグラファー/フリーランス）

■内 容：

2011年8月に撮影したタイ国東北地方農村の子どもたちの生活についての映像と、継続して取材されている福島県南相馬市の原発被害者への取材ルポの映像を見て、「現地に在るリアル」を、映像を通して伝えることの意味や重要性についてお話いただきました。



台風の影響で、交通機関も乱れており、豪雨のなか、参加に熱心な方々が集まってくださりました。フリップを用いてそれぞれの意見やコメントを出すとともに、野田さんにCaféの様様を撮影してもらい、取材される体験もしました。またその時のビデオは編集して、youtubeにアップしました。

http://www.youtube.com/watch?v=Y40dITQ0i_8

第3回 I Do Café 11月6日（日）15：00—17：00 於 ECC 国際外語専門学校7階 参加者16名

■テーマ：フィリピンにおけるしょうがい児支援について

■ゲスト：Marie Bella P. chulipaさん（JPCOM-CARES、社会福祉士）

Sharon E. Bacowengさん（JPCOM-CARES、作業療法士）

■内 容：

C4Cが支援を行っている、フィリピン・ルソン島山岳地帯にて、しょうがい児支援を行っているJPCOM-CARESの取り組みと、フィリピンにおけるしょうがい児・者の暮らしを取り巻く問題についてお話をうかがいました。初めて支援団体からゲストを招いてのCaféを行い、ECC国際外語専門学校の学生が通訳ボランティアとして関わってくださいました。話題提供者が、社会福祉士と作業療法士であったためか、車いすの方や今年9月に行ったフィリピン・スタディーツアーに参加した学生も参加しました。またこれまでのCaféの参加経験者も多く、リピーターが生まれつつあるようでした。残念ながら、ディスカッションする時間がなく、心残りのまま解散しました。

第4回 I Do Cafe 2012年1月21日（土）13:30-16:30

於 いわて県民情報センター・アイーナスタジオ 参加者14名

■テーマ：I Do project からひろがる、それぞれのI Do, We Do

■ゲスト：鈴木佐知子さん、奥田行孝さん（I Do project メンバー）

八重樫綾子さん、松本唯美さん（いわてGINGA-NET）

■内 容：

ポストカードを作って販売し、その売り上げでフィリピンに井戸を掘ってきたI Do Projectのメンバーより、projectに関わったキッカケや井戸を掘りに行って感じたことを聞かせていただきました。フィリピンで想いを形にして帰ってきたメンバーたちが、被災地での支援活動やI Do Projectの次のステップに取り組むなど、それぞれのその後のI Do, We Doを聞かせていただきました。初めて、大

阪を飛び出しての I Do(移動)Cafe となりました。岩手県で被災地支援に関わる学生たちが多数参加してくださり、これまで以上に若者たちの声を聴き合う場となりました。

第5回 I Do Cafe 2012年5月19日(土) 14:00~17:00 於 神戸自由学院 参加者 43名

■テーマ：学校だけちゃうんちゃうん！？ ~自由な学びフリースタイル

■ゲスト：田辺克之さん(神戸自由学院 代表)

竹林由佳さん(神戸自由学院 スタッフ)

神戸フリースクール、神戸自由学院の在校生と卒業生 3名

■内容：

子どもたちが自ら何を学ぶかを決めその方法も自身で考える「自由な学び」の場づくりから、これまでの歩みや子どもたちとの出会いについてお話ししていただきました。在校生や卒業生も前に座って自分の言葉で、フリースクールに出会う前のこと、自分にとってのフリースクール、これからの自分について、語っていただきました。子どもたちの言葉に刺激されたように、自分の気持ちを皆さんの前で話してくださる保護者の方もいらっしゃいました。ゲストが実際に活動(実践)をされている場所での開催ということで、フリースクールや神戸自由学院に通う子どもたちやその保護者の方々が多数参加してくださり、子どもたちの声をたくさん聞くことができた時間となりました。



2-3. 外国人招聘研修プログラム

2011年11月3日から11日まで、C4Cが支援するフィリピンの団体 JPCOM-CARES の職員マリベルとシャロンの二人を招聘し、C4Cの連携団体であるNPO法人み・らいずの協力を得て、国内のしょうがい児・者支援施設などを見学し、体験してもらいました。訪問先は、株式会社エビス/ヘルプセンターえびす/児童デイサービスえびす夙川、NPO法人み・らいず/ガイドヘルプサービス、堺市ユースサポートセンター、社会福祉法人ライフサポート協会、NPO法人サンフェイスなど、若手が積極的に運営し、しょうがい者自立支援を行う福祉施設およびサービス機関が主でした。



また、同時にフィリピンのしょうがい児・者が置かれた状況を、C4C主催の I DoCafé、愛媛社会福祉協議会、近畿大学(NPO法人み・らいず代表河内さんの授業)にて報告してもらいました。このようなプログラムを行うことは、日本の一般の人々にも、フィリピンなどのアジアの子どもたちがおかれた社会的環境を理解してもらい、C4Cの支援者を増やすことにもつながります。

C4Cとして、初めて外国人を日本に招聘したプログラムであったため、多くの方々に様々な面でお世話になりました。今後も、日本国内外の子ども支援の場で協働していきたいと思っております。

2-4. 視察

①宮城県石巻市

2011年6月17-19日、桑原代表、加藤理事、山田理事、および高木会員が、東日本大震災の被災地である宮城県石巻市を訪問しました。まず宮城県災害ボランティアセンターを訪問したのち、石巻市で被災した子どもたちの居場所づくりをしている民間団体ほっとすぺーすに行きました。被災地で

は、学校や遊び場も失われ、また被災した親も様々な理由で忙しく、子どもに構う時間がありません。子どもに寄り添う人や居場所がないことから、他地域から来た若い大学生やNPOが、石巻市駅前に場所をかりて、自由に子どもが過ごせる場所づくり（ほっとするスペース）を始めていました。若い大学生などが、子どもたちの相談役となり、少しずつ子どもの笑顔が取り戻せるよう様々な活動を企画していました。また渡波など津波に襲われた地域を視察し、その被害の甚大さを目の当たりにしました。

②タイ国・コンケン

2011年8月5-10日、映像カメラマンの野田亮介さんを招聘し、C4Cのタイ連携団体であるカムクワンキャンペーン財団のビデオを記録しました。将来、ビデオを編集し、日本での団体広報活動に使用するためです。現地では、子どもたちの読書会活動、伝統音楽の練習などを見たほか、村を訪問し、子どもたちの家族や生活状況を直接観察しました。また村長、僧侶、学校の先生、数人の中学生にインタビューし、それらも録画しました。

2-5. その他研修

①全国ボランティアフェスティバル TOKYO (2011年12-13日)

栗原代表理事がパネラーとして参加するボランティアフェスティバルに、加藤理事、山田理事、高木会員が参加しました。日本のボランティア活動・NGOの現状を知り、代表理事の講演・セミナー活動を観察するためです。全国から多くの人々が参加していましたが、ほとんどは主催者である東京の団体関係者でした。また東日本大震災のボランティア、復興に関わるパネルも多かったのが、今年のフェスティバルの特徴でした。

3. パートナーシップ推進事業

3-1. 調査事業

■ラオス

2012年3月13日-3月18日、加藤理事が、ラオスの首都ビエンチャンのいくつかのNGOを訪問しました。将来ラオスでもC4Cの活動を広げるために、子どもやコミュニティ開発に関わる市民団体を訪問し、ラオスの子どもや開発に関わるローカルNGO/市民団体の活動状況について聞き取りを行いました。

訪問先：①PORDEA (Poverty Reduction and Development Association)、②ALC (Action with Laos Children) ラオスのこども・ラオス事務所、③DCDC (Donkoi Children Development Center) ④安井清子さんの子どもセンター

ラオスは社会主義国であるため、近年に至るまで市民/民間団体の設立は許可されず、世界規模の国際協力・支援団体のラオス支局だけが存在を許されてきました。現在、政府は外貨獲得の一つの手段として、限定的ですが、ラオス人による団体の設立を認可しはじめています。今回は短期間の調査、それも首都ビエンチャンだけでしたが、グローバル化の急激な波をビエンチャン中で見聞することができました。そしてまたここでも、子どもたちは社会経済的変化の中で、先が見えない状況にいます。今後、ラオスで活動する可能性を継続して模索していきたいと考えています。

■カンボジア

2012年3月25-30日、桑原代表、加藤理事がカンボジアで調査を実施しました。今回の渡航調査の目的は、将来カンボジアでもC4Cの活動を広げるために、子どもやコミュニティ開発に関わる市民団体を訪問し、カンボジアの子どもを取り巻く社会的状況とローカルNGOについて聞き取りを行うことでした。

訪問先①唐沢幸子さん（カンボジア・トラスト義肢装具士養成校）②Rural friend for Community Development (RFCD)③Help Old Age and Miserable People (HOM)④Khmer Community Development (KCD)⑤Khmer Ahimsa (KAH)

特に②と④のNGOは、活動内容は異なりますが、どちらもローカルの人々としっかりとして協働関係を結んで活動しているような印象を受けました。②のRural friend for Community Development (RFCD)は、プーサート州のローカルNGOの一つで、もともとマイクロクレジットを行う住民たちが集まって組織化されました。今はActionaid（南アフリカに本部がある国際援助団体）の支援を受けています。基本的なプログラムは、女性の権利保護、食事の向上、子どもの権利保護、グッド・ガバナンスの4つ。活動地域は、トンレサープ湖の水上生活者を多く含むため、ボートで湖に出て、視察を行った。水上生活者は、季節によって移動しなければならず、衛生状態やさまざまな社会資源（保健所、病院、学校、役所など）へのアクセスが非常に悪い環境にあります。支援によって、水上小学校はできましたが、中学校以上の高等教育は遠い陸地にあり、RFCDがボートによって生徒の通学支援も行っています。

④のKhmer Community Development (KCD)は、2002年にカンボジア人大学生が作ったボランティアサークルから始まり、現在はローカルNGOとして、ドイツなどの複数の海外援助機関からの支援を受けています。活動地域は、プノンペン南部のカンダール州Prek Chreyで、ベトナム国境まで約10キロのパサク川下流に位置するベトナム人とカンボジア人が混在したコミュニティです。度々、洪水に覆われる地域ですが、地域の一番の問題は、国籍の問題です。カンボジア国籍を持たず、また社会主義国であるベトナムに所属することを恐れるベトナム人コミュニティとカンボジア人コミュニティは、隣人として生活しながらあまり関係を持ちません。それで、子どもたちの交流を通じて平和的關係を取り結ぼうとしている団体です。

今後、協働するためにも、さらに調査を進める所存です。

3-2. 大学ボランティアセンター訪問

今後の活動の広報協力をお願いし、大学ボランティアセンターのスタッフの方々と顔の見える関係を築くことを目的に、関西の大学ボランティアセンターを訪問しました。直接お会いしてお話をうかがうことで、ボランティアセンターの運営体制や学生の活動の様子を聞かせていただき、状況がよく理解できました。今後は、大学ボランティアセンターだけでなく、他団体へも訪問先を広げ、広報活動を継続していきます。

5月18日（金）13時～14時 神戸常盤大学

5月18日（金）16時～17時 関西大学

5月25日（金）12時30分～13時30分 龍谷大学 深草キャンパス

5月30日（水）16時～17時 佛教大学

4. 情報提供事業

4-1. ホームページ、ブログ、facebookによる情報発信

■ホームページ：

2012年度中の完成を目指して制作中です。

■ブログ：

現在、下記の2つのブログで活動案内・報告を行っています。どちらも、同じ内容を発信しています。今後は、現地のカウンターパート団体の活動の進捗報告を行い、支援いただく方や関心を寄せてくださる方への情報発信にも力を入れていきます。

★<http://ameblo.jp/community4children/>

★<http://blog.canpan.info/c4cc4c/>

・昨年度（5月末現在）の記事数：39

・総アクセス数：1,411 プレビュー

■Facebook：

イベントや活動中、支援団体訪問中など、facebookを通して、リアルタイムで情報・活動の発信を行っています。C4Cで出会った人同士の交流やネットワークづくりにも役立っています。

検索ワード：一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン

4-2. イベント参加

①ワン・ワールド・フェスティバル 2012年2月4日（土）、5日（日）於 大阪国際交流センター

関西で最も規模の大きい国際協力のお祭り「ワン・ワールド・フェスティバル」に、活動紹介のブースを出展しました。今回で19回目を迎え、2日間でのべ17,000人が来場、政府機関や教育機関、NGO、企業等147団体が活動紹介の展示を行いました。

C4Cの活動やアジアの子どもたちの状況を知っていただき、関心を持っておられる方と新たに出会うために、初めて国際協力イベントに参加し、ブースを出展しました。また、フィリピンのしょうがい児のお母さんたちが手作りした商品の販売なども行いました。2日間で、約50名の方々とじっくりとお話をさせていただき、200名ほどの方に団体チラシを手渡しました。

2日間、フィリピン・スタディツアーや I Do Cafeの参加者など、5名の方がボランティアで参加してくださいました。ブースを訪ねてくださった来場者の方に、実際に見聞きし感じたことを自身の言葉で伝えてくださり、それぞれの体験を発信していただく機会ともなりました。

②アースデイ神戸 2012年5月4日（金）、5日（土）於 みなとのもり公園

アースデイは、地球環境の問題について考える日として、



世界各国・各地域で様々なイベントが開催されています。アースデイ神戸は、2007年にスタートし、今年で6回目を迎えました。エコロジーグッズやフェアトレードの物販ブース、オーガニック食材などを使った飲食ブースなど105団体が参加し、両日約6300人の来場者がありました。

ワン・ワールド・フェスティバルで出会った他団体の方よりご紹介をいただき、広報活動の一環として出展しました。

国際協カイベント「ワン・ワールド・フェスティバル」とは会場や来場者の雰囲気や関心も違い、足を止めてゆっくりと活動の紹介を聞いていただくことが困難でした。逆に、フィリピンのお母さんが作った手作りのアクセサリや雑貨、コーヒー粉を、「かわいい」、「おいしい」と言って買ってきてくださる方が多く、物品販売は好調でした。イベントによって、ブースの作り方を変える、出展のテーマを変える必要性を感じました。

また、じっくりとお話をさせていただいた中で、数名の方がI Do Cafe Vol.5（5月19日実施）に参加してくださり、新しい方とのつながりが生まれた機会ともなりました。

4-3. 講演・執筆活動等

- ・「テーマ：災害ボランティア」
 栗原英文代表理事インタビュー記事、北日本新聞2011年7月31日
- ・「座談会：こころをつなぐボランティア」
 栗原英文代表理事インタビュー記事『月刊福祉』2011年8月号
- ・「誰のための、何のための災害支援？」
 栗原英文代表理事インタビュー記事『Vo10』2011年7・8月号
- ・栗原英文「災害時の子ども支援における自治体とNPOの協働」『子どもの権利研究』20：34-36、2012年2月

4-4. その他

ビデオグラファー野田亮介さんの協力により、C4Cの広報用動画を制作しました。